

小野寺晴

手話居酒屋におけるろう者と聴者の共生的交流
—障がいの配慮を超えた学び合いの場として

来る 2025 年には、100 年の歴史を持つ「デフリンピック」が初めて東京で開催される。

「Deaf（ろう者）」と「Olympic」を組み合わせた名を持つこの大会は、きこえないアスリートを対象としたオリンピックである（全日本ろうあ連盟 2024）。この大会をきっかけに社会全体にろう者への理解を深める契機となることが期待されているが、その一方で、今日の日本社会において、ろう者と聴者の「共生社会」の実現には、まだ多くの課題が残されているのも事実である。

本研究では、実際にろう者と聴者の共生が進む現場の事例を調査し、共生社会のあり方を探るため、東京都新宿区にある『串揚げ居酒屋ふさお』にて、2023 年 12 月から 2024 年 10 月にかけて、筆者が週 1 回～月 2 回、客として通い、従業員や来客に対して参与観察と非構造化インタビューを行った。

調査の結果、『串揚げ居酒屋ふさお』におけるろう者と聴者の共生のあり方は、既存の合理的配慮にとどまらず、双方の違いを尊重し合い、互いに学び合う関係が築かれていることが明らかになった。この場所では、ろう者と聴者が、言語や文化の壁を乗り越えてコミュニケーションを行い、共に楽しむ環境が整えられており、積極的に交流し、新たな理解や視点を得ることができる空間を作り上げている。また、自由で開かれたコミュニケーションの場として、コミュニケーションの障壁が一時的に生じても、店主や客はそれを問題視せず、どうやって伝わるかを共に考え、最終的には理解を深める機会となる。このプロセスを通じて、双方は新たな視点を得るとともに、相手の文化や背景を尊重する重要性を実感していた。

『串揚げ居酒屋ふさお』での交流は単に理解し合い支え合うことにとどまらず、共に学び合うことで、より豊かなつながりを生み出すことに繋がっており、聴者が手話を学び、ろう者の文化を理解しようとする姿勢が見られ、ろう者は聴者との対話を通じて新たな視点や知識を得る機会を持っている。こうした双方向的な学びは、共生社会を形成するために不可欠な要素であり、双方が学び合うことで、社会全体がより包容力のあるものへと変化していく可能性を秘めている。

この調査結果を踏まえると、ろう者と聴者が共生するためには、障がい配慮を超えて、互いに学び合い、理解を深め合う姿勢が必要であることが明らかになった。『串揚げ居酒屋ふさお』のような実践的な事例が示すように、共生社会の実現には、一方的なや配慮だけでなく、互いに尊重し、積極的に学び合う関係性の構築が求められる。このような関係が広がることによって、ろう者と聴者の違いそのものが社会の価値となり、真の共生社会が実現することが期待される。

(1091 字)